優秀賞

千万円の価値

山形県　山形県立東桜学館中学校　三学年

髙橋　羽珠

「私が死んだら二人に千万円ずつ入るから。」小学五年生のある日、母は怖いくらい真剣に、私と妹に言った。意味が分からなかった。

『どうしてママは、わざわざこんな怖い話をするんだろう。そんなこと、考えたくもない。ママは私にとって千万円以上の価値なのに。』そう思いながらその夜ベッドに入った私は、母がいなくなることを想像して泣いた。

あの頃の私は、生命保険の意味も、「もしもについて考える」ということの意味も分からなかった。しかし、中学生になった私は、少しずつ命について考えるようになった。地震や洪水などの自然から命を奪われてしまう人、苦しむ人がいること。世界では今でも人と人との戦争が起き、当たり前を奪われた人がいること。そして、私の近くでも親戚や、私より幼い友達の葬式に出たことで、身近な人の死も経験した。

人は毎日、どこかで亡くなっている。その事実を知れば知るほど、命の尊さと同時に、そのもろさも感じるようになった。今日まで元気だった人が、明日まで元気とは限らない。今、隣で笑いあっている大切な人と、明日も会えるとは限らない。

「千万円ずつ入るから。」

私はあの日の母の言葉を思い出した。小学生の私は、母を失うくらいなら、千万円なんていらないと思った。今の私は、同じ千万円という言葉の捉え方が変わっている。もちろん、千万円は大金だ。でも、私にとって母はそれ以上の価値がある。千万円で母を買うことはできないし、母を失った悲しみを埋めることもできない。

だから私はこう捉えた。あの千万円は私の母そのものの価値ではないのだと。そこには、母がいなくなった後も私と妹は生きていかなければならない現実と、そんな私達が困らないようにという、母の思いがある。そう考えると、あのとき母があんなに真剣だったのは、自分がいなくなった「もしも」の未来まで考えて、私達を守ろうとしていたからだったのだ。

生命保険は、病気になったときなど、加入している本人の助けになる場合もある。でも、亡くなったときに支払われる保険金を、本人は使うことはできない。それでも、多くの人が生命保険に入っている。私は、それは〝誰かを想っている

から〟だと思う。自分がいなくなった後に遺される家族のため。大切な人がその後も生きていくため。自分は見ることのできない未来かもしれないが、それでも誰かのために。

あの日の私は、千万円より母に生きてほしいと願った。でも今の私は、千万円が母の代わりにはならないことを知っている。そして、その千万円に私と妹を想うあたたかい母の気持ちが詰まっていることを知っている。

もちろん、千万円をもらわなくて済むにこしたことはない。

ただ、誰も予想できない未来に備えるときに、私も誰かを思いやれる人でありたい。